それが段々近づく。

山のいたゞきから兎狩りでもするように七八人の男が『まだ死にはしまい』『たつた一人の女の爲か』『情けなや』とか口々に『ヒーホー』とか叫んで、ザワ〳〵攻め寄せて來る。

俺を捕へに來たのだな、俺は突作に思つた。

斯うしちや居られない。

俺にへちな道を教へて、山へ追ひ込んだのが彼等の豫定の計畫だつたんだ。

俺は駈ケ足で、前の池の所まで引き返した。

そして道を急いだ。

何しろ停車場へ出樣と思つた。

俺は廣い通りに出て、元の村の方へ歩るき出した。

邊りは黄色かつたが、實は一、二寸に伸びた麥の上を、すが〳〵しい朝の風が、吹き渡つてゐたのかも知れない。

向ふから一臺自動車がやつて來る。